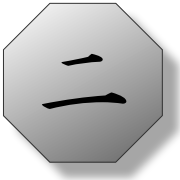
黄金の船、
たどり着きたる先



麦（穀物Ｐ）

目次

第五章　新年度、チーム始動……………………………………………… 4
第六章　ゴールドシップ・クルー・クラブ　第四回定例会…………………… 66

第五章　新年度、チーム始動

1　商店街生花店トレセン学園前出張所

新年度が始まった。トレセン学園――日本ウマ娘トレーニングセンター学園では今年も多くの新入生を迎える。入学式のための華やかな飾り付けがされている校門を眺(ながめ)て大きく伸びをした。午前七時半を過ぎ、もうそろそろ新入生や彼女達を出迎える在校生が三々五々登校してくるころだった。

自分は朝早くから学園に来ているものの、年度末にチーム結成のための手続きを慌ただしく終わらせた反動で、今日の仕事は無かった。――いや、やろうと思えば片付けるべき仕事は無限にあるものの、無限の仕事をだらだらとしていたら休みや新しいことをする時間が消失してしまう。今日は改めて学内を歩きつつ、新年度のチーム運営計画を具体化することにした。

第一の活動はチーム名の決定だった。今年度からのチームの名称は、一応『自重』ということになっている。チームメンバーの面々が昨年度末に理事長から頂いたばかりの二文字の訓戒をそのままチーム名として定めてしまった。ただ、さすがに不可解すぎるので理事長には書類提出時にゴニョゴニョと話をつけて、その名前は仮称ということにした。近いうちに別の名前を届け出る、もしその前にチーム名が必要になったら、昨年度までのチーム名をそのまま登録する、と。

そしてすぐに第二の活動。さっき校門の前にやってきて、俺の横でいそいそと何かを組み立て始めた長身の美人にして我がチームのメンバーにインタビューをする。

「おはようゴールドシップ。朝から何か屋台でもやるつもりか？」

その問いに、こちらに背を向けたまま挨拶代わりとばかりに片手を挙げつつ返答が

あった。

「花屋をな。入学式の時ってなんか花束とか渡したくなって、でも卒業式と違ってあんまり用意してこないもんだろ、そこに花屋があるととても助かると思わね？」

「まあな」

彼女は先日の選抜レースの時は食べ物系の屋台を出していたし、同僚に聞くと事あるごとにいろいろな食べ物を売り捌いているそうだが、今回はそうではないらしい。入学式だとそもそも花束などの贈り物を渡すタイミングがないのもあるが、だからこそふと思い立った時の需要をすくい上げる商機があるのかもしれない。

屋台に関して、いくつか聞いておきたいことを質問した。

「花はどこから仕入れてきた？」

「商店街の花屋のおばちゃんから。そこの出店みたいな感じだ。売れようが売れまいが日当がついて、さらに売れたら半額はくれるってよ」

「店長さん、ずいぶん気前がいいな」

破格に過ぎる大盤振る舞いだと思ったが、あそこの商店街の方々ならそのくらい学園の生徒向けに協力をしてくれても不思議ではない。しかしこのゴールドシップが、自称七百

歳の謎の存在が、ただの思いつきで花屋の出店を開くとは思えなかった。
「それで、店を開く本当の狙いは？」
その言葉に、ゴールドシップはニヤリと笑って返した。
「そのツッコミ、さすがはおっちゃんだ。新入生と編入生の中に、アタシのループ脱出の鍵になるウマ娘がいるかもしれねえ。今までリストアップしてきた中でも、この世界ではまだ入学してきていない奴が何人もいる。そいつらを探す前にここにいる連中を一網打尽にして――ってほどの数じゃねーけど、顔は拝んでおこうってわけよ」
やはり、主な目的は人探しらしかった。トゥインクル・シリーズに出るウマ娘は日本中、あるいは世界中をトレーナーとともにそれぞれのローテーションで駆け回るため、探し出すのは骨が折れる。しかし今の時期ならば新入生も編入生も一同に会するため確かに捜索しやすいに違いなかった。
「なるほどな。なら新入生と編入生の名簿はいるか？」
できる限りの協力をするとの約束をしていたので、その『できる限り』の提案をした。
「ありがてえ！　でもいいのかおっちゃん？　緑のあ――じゃなかった、たづな御大から直々にシメられたりしないか？」

「選抜レースの名簿をひったくって丸をつけた張本人が一月経たずに情報漏洩の心配をしてくれるとは大変素晴らしい。明日の天気は間違いなく大飴だ。ペロペロキャンディが空から降ってくるから注意」

「うっせ」

ゴールドシップはあかんべーをしてそっぽを向いてしまった。あの何者も恐れず派手に何でもやりそうなゴールドシップが理事長秘書のことは気にするので、面白くなって茶化したらへそを曲げてしまったらしい。花を品種や色別にバケツに挿して陳列しているところだったが、それを続けながら俺を器用に尻尾でビシバシ叩いてくる。流石に痛い。

「すまんすまん。まあ、新入生はクラス分けが教室棟昇降口に張り出されているから、名前部分は公開情報だな。編入生の方は確かに公開の名簿はどこにもないが、だいたいは有名だから丹念に調べて回ればすぐに分かることだ。公開情報とほとんど変わらん」

『丹念に調べて回る』のが時間がかかりすぎて非常に難しいので、それを公開情報と変わらないと強弁するのはまさしく詭弁だった。ゴールドシップもそれは百も承知だと思うが、俺の口車に乗ったという形ができれば何かあっても俺が責任をかぶれる。そしてゴールドシップは俺の詭弁を受け入れた。

「そっか。じゃあもらえると助かるぜ」
「ちょっと待ってろ」
急ぎ足でトレーナー室に向かい、名簿を印刷してファイルに綴じた。さすがにデータファイルをそのまま渡すと色々と面倒になりそうだからそれはせず、印刷する箇所ももちろん部外秘の部分は外し、万が一のことがあっても公開情報と主張できる部分だけにした。
校門の前に戻ってくると、立派な花屋のディスプレイが完成していた。登校し始めた新入生達は目を丸くして立ち止まっているし、在校生達もゴールドシップがいつもの食べ物系屋台ではない店を出していたので、驚きの表情を見せつつ通り過ぎていた。そして、当然その光景はいつも校門で生徒を出迎えるあの方の目に留まるわけで――
「あの、ゴールドシップさん？　そして白江（しろえ）さん？」
ゴールドシップと自分の名前を呼んだたづなさんが少し、いや、それどころではない困り顔で声を掛けてきた。用件は分かりきっているが、切り抜けるに堂々とした応対あるのみ。
「はい、なんでしょうかたづなさん」

「校門のところで勝手にお花屋さんを開店するのはちょっと……」

至極もっともな見解なので、ここはうまく丸めて拝み倒すしかない。話術と経験、最終的にはたづなさんとのそれなりに長い同僚としての付き合いを盾に説得を試みた。開店許可にあたり本当に効果があったのはたまたま通りかかった理事長の鶴の一声だった。門前に揃った色とりどりの花を見るやいなや目を輝かせたので、この機を逃すまいと開店のお伺いを立てたところ、即座に『許可ッ！』と太鼓判を頂けた。ありがとうございます理事長。

かくして無事に花屋開店と相成った。だいぶ生徒の流れが増えつつあり、多くの新入生らしき子や在校生が目を丸くしながら通り過ぎ、十数人ほどは立ち止まり、さらに何人かはこちらに歩み寄って実際に花の品定めを始めていた。

いつもの屋台と違うためか、ゴールドシップは威勢のいいかけ声を出したりすることなく、にこやかにして静かに立っている。この姿を見ると、自分が伝え聞いた通り、入学初日のゴールドシップが同級生の関心を集め、その翌日に破天荒モードに戻って、クラスメイト全員をその振る舞いの極端な温度差で保健室送りにしてしまったという伝説級の大惨事（？）がまた起きそうだった。

「あの、こちらの花束をいただけますか？」
「ありがとうございます」
対応も気品あるお嬢様モードだ。現にこの花束を買い求めた在校生はゴールドシップの応対に頬を赤らめていた。相手がゴールドシップだと知っているのにこの感じだと、新入生はたちどころにゴールドシップに心奪われるのではないか。
ちなみにその心配から数分後、遠くからポスッ、と何かが倒れるような軽い音がしたのであたりを見回すと、物陰にアグネスデジタルが幸せそうな笑顔を浮かべて倒れていた。近くの在校生やデジタルのトレーナーとともに彼女を保健室に搬送し、また戻ってくると屋台の回りに人だかりができていた。ただ花を売るだけでなく、ツーショット撮影も引き受けているらしい。かなりサービス精神旺盛だった。俺もお客さんの誘導やら何やらを手伝った。
あらかた人が捌けて、そろそろ入学式が始まる時間になると、花はすっかり売り切れていた。食べ物系の屋台でも綺麗に食材を使い切って商品を売り切る商才を見せているらしいとは聞いていたが、それを花屋の出店でもやり切ってみせたのはさすがだった。

「お疲れさん」
いい笑顔で額の汗をぬぐっているゴールドシップに、近場の自動販売機で買ってきたサイダーのボトルを渡した。彼女は受け取るやいなやボトルの半分くらいを一気に空け、満足そうに息を吐いた。
「プハーッ！　炭酸が身にしみるぜ！　ありがとな、手伝ってくれて」
「お安い御用だ」
花のスタンドや屋台を畳んで撤収する作業を進めつつ、ゴールドシップに本題を尋ねた。
「それで、鍵になりそうな生徒は見つかったか？」
「三人ほどな。名簿で見て、実際に通った時に姿も見て確信した」
そう言うと、ゴールドシップは名簿をこちらに寄越してきた。丸がついていた新入生・編入生の名前を見ると、
「えーっと、ホッコータルマエさんは確か前言ってたな。ダートでかなり有力な選手になりうると」
「おう。あいつとは過去の世界では同じレースこそ走らなかったが、わりと付き合いが

あった方だ。タルマエがバリバリ勝ってた世界は持続期間が長かったから、必要不可欠だと考えてる」

「なるほど。で、次はネオユニヴァースさん、か。ちょっと変わった経歴のようにも見えるが」

「ネオユニヴァースはこの世界のループ、世界そのものを解く鍵になるんじゃねえかと確信してる。百四十三回目のループの時に初めて接触して、いろいろとアタシに起きている現象を掴むための仮説をくれた」

「なるほどな。三人目は……ん？」

三人目は名簿に丸がついていたわけではなく、ゴールドシップによって余白に手書きで書き足されていた。

「この子はリストに無かったのか。なぜに名前を？」

「さっきふと思い出した。過去の世界で何回か遭遇して、やっぱりこの問題を解決する助けになると感じた奴だ。この世界でもどっかで姿を見たから今度こそ勝てると思ったが、なぜか名簿になかった。学園にいないことになってるかもしれんから、ちょっと探すのに苦労しそうだな」

「確かに。ひとまず、ホッコータルマエさんとネオユニヴァースさんはどちらも新入生か。チームへの正式所属は基礎トレーニングの課程を終えて選抜レースに出てからになるから、その前に声をかけて勧誘するか」

「だな。そうだ。忘れるところだったぜ」

ゴールドシップが何かを思い出したかのようにポケットを漁り始め、何やらびっしり書かれたメモ用紙を取り出した。

「あと、在校生でこのあたりには注意を払っておいてくれ。だいたいみんなトレーナーがついてっからうちのチームに引き込むことはなさそうだが」

渡されたメモを見て絶句した。ウマ娘の名前が並んでいるが、リストがとても長い。

「このリスト、百人くらいいるんだが」

「いろいろアタシと関わりがあったり、あるいはこれから関わりを持つことになる連中だ。みんなGⅠウィナーになるぞ。違法賭博ならこいつらの名前を見た瞬間百万や千万の単位でツッパしたらミラクルおじさんの仲間入りだ。百パーバレて投獄されるけどな」

まるで自分がかつてやったかのような訳知り顔で話されたが、保身のためにこちらからは何も聞かなかった。自分の手に余ることからはそっと距離を置く、三十代のちょっと哀

しい処世術だ。

2　三か年計画

屋台を片付け、ゴールドシップともどもトレーナー室に引き上げた。今日はチームメンバーを招集していないので、この部屋は俺とゴールドシップの二人だけだった。昔語りを聞いて以降は、ゴールドシップに会う時はわりとチームメンバーが複数いたから、こうして二人だけなのは約一か月ぶりくらいだった。

「ふう、疲れた」

「学園のトレーナーがこれくらいで疲れてどうすんだよ」

「毎回何かしら活動するたびに、二十代の時なら難なく達成できたことがあとちょっとのところで体力切れになる。それが三十路のつらいところだ」

折に触れて同僚とこぼし合う愚痴をそのまま語ったら、ゴールドシップが手で大きくバ

ツを作ってブーイングしてきた。
「アタシより六百七十歳も若いのにオッサンぶるんじゃねえ！」
「それ言ったら世の中全員若者扱いなんじゃないか？」
「そうか。そうだな、みんな若いよな……」
急に彼女がブルーな雰囲気になったので、これはひょっとしてバッドエンドフラグが立ってしまったかと内心戦慄していたら、こちらを向いて底抜けの笑顔を見せてくれた。
「なーんてな！　おっちゃん相手ならいくらでもしんみりできそうだが、入学式の日だしそんなのは後回しにして、まずはもっと明るい話をしようぜ。暗い話は適当に酒でも飲みながらがいいんじゃね？　週末空いてっか？」
「ゴールドシップは十七歳だろ。お酒は二十歳になってから」
「真なるアタシは七百歳だからセーフ♡」
「自称としか扱われないから諦めろ。前聞いた時は遠い昔の別の世界の話だったから不問にしたが、今やってバレたら処分まっしぐらだ。俺はまだ学園をクビになりたくない」
しれっと飲み会の話になったので今のうちに釘を刺した。いくら本人が七百歳と強弁したところで誰も信じるとは思えず、彼女を知らない人相手ならその外見から二十代だと誤

魔化せても、学園の教職員や他の生徒たちはそうは行かない。ゴールドシップと一緒に飲んだら俺が処分される。ちょっとローンを抱えているからクビになると死ぬ。いのちだいじに。

「つまんねえの。……遠い昔に会ったあのベルちゃんのトレーナーも、自称が何歳でもあなたは未成年だとか何とかって似たようなこと言ってたな」

あの、という言葉で出てくるということは、ゴールドシップの昔語りで出てきた過去のループの世界のことに違いなかった。

「過去にきちんと諭されてるんなら守れよ」

残念ながら、俺の言葉は続く激白でかき消されてしまった。

「それがクリスマスパーティーの時だったろ？　それから何日か後の年明けに御屠蘇だ邪気祓いだって言って一升瓶をあけて酔いつぶれて、ベルちゃんにバレてしこたま怒られて二十四時間つきっきりで監視するって脅されたとこまでがセット」

「おいこらゴールドシップ」

「二十歳前に飲んだのを数えたら通算で前科百犯だ。諦めてくれ」

彼女はケラケラ笑っていたけど、やはり過去のこと、とりわけ百四十三回目の世界のこ

とを口にすると、どことなく悲しげな雰囲気を纏うのが感じられた。今まで聞いてきたことを総合すると、ゴールドシップにとって一番未練がある過去の世界がそこであることは明らかだった。

「ま、昔のことはさておき、これからの話だ。おっちゃんを先頭とするチーム『自重』――」

「(仮)」

思わずツッコミを入れ、ゴールドシップから睨まれた。

「名前を変える気かよぶーぶー、チームメンバーの意志を尊重しろー」

「善処する」

数秒ほど疑いの目で見られたものの、彼女は引き下がった。

「仕方ねえ。その話はまた後でじっくりやる。まずはアタシ自身の計画だ。ひとまずは三か年計画で行こうと思う。アタシのジュニア級、クラシック級、シニア級の一年目というところだな」

トゥインクル・シリーズを駆け抜けるにあたって最も重要とされる「最初の三年間」

だった。確かに区切りとしてはちょうどいい。
「路線はやっぱりクラシック三冠か？」
「ああ。そこは王道というか、今までで一番長くどん詰まりじゃないループを続けられたところに合わせたい」
トゥインクル・シリーズを志し、駆けるウマ娘達の憧れのひとつ、クラシック三冠。その夢は壮大にして困難だが、彼女ならよほどのことがない限り達成できそうだと直感が告げていた。初回のチームトレーニングの時の成果もその直感を補強した。
「ゴールドシップなら、今の素の力でも十分達成できると思う。だからあとはそこに至るまでに怪我をしたり、調子を崩さないようにするトレーニングに専念してもいいくらいだ」
「そっか。何百年も走ってアタシも随分バケモノみたいになっちまったんだな！　ま、バケモノらしくバケモノ級の目標達成と行くか」
「ああ。レースは勝負事だからどうしても『予想外の敗戦』が起きる。その確率を減らしていきたい」
「だな」

「シニア級二年目以降はどうしたい？　まだ気が早すぎるかもしれないが」
「そうだな……いろいろ走りたいけど、三年目までに天皇賞・春は勝たなきゃならんと思う。たぶんそれも鍵のひとつだ」
「そうか。そこまでは体力を持たせないとな」
「アタシの過去のループでは、シニア級三年目のその時期が体力の限界になることが多かった。それ以降はもうまともに走れねえ」
「わかった」
ゴールドシップの見解をメモしておいた。この先の作戦を考えるためには重要なことだった。

「チームメンバーの三年間のプランだが――そうだな、まずはマックちゃんから行こう。マックイーンは本人の希望通り天皇賞で勝たせるのがいい。たぶんステイヤーの身体が完成するのがクラシック級の秋あたりまでかかる。慌てちゃ丸損確定だ」
「どこかで答えを見てきたようなアドバイスだな」
「まあ、二百回は見てきたからな」

名伯楽と謳われる稀代のベテラントレーナーとて、天皇賞を観ることができるのは一年について春と秋の二回だけ。距離で分けるなら年一回しかない。天皇賞に指導を担当しているウマ娘を出走させるとなるとさらに難しくなり、トレーナーになってから定年までの間に数回でも出られたら、ウマ娘もトレーナーも破格の強さと言ってもいい。

「マックイーンなら怪我さえしなければ確実に出られるはずだ。おっちゃんならホープフルステークスをホープレスステークスに変えちまう博打はしないだろうからその点も安心」

「なんだその嫌過ぎるレース名は」

ホープレスステークス……この単語は今度同僚と宴会でも開いた時に話芸ネタに混ぜ込んでおこうか。

「シニア級一年目の天皇賞・秋はマックちゃん一番の鬼門だ。二百回中百八十三回やらかして降着処分を食らってる。ひどい時にゃ十八人立て一位入線なのに十八着降着だ。トップで着いてシンガリじゃあさすがに見てられなかったな。しかもさらにそのうち百九回は、秋のリベンジを果たした春天の後に屈腱炎を起こして一年棒に振ったり、下手すりゃそのまま引退に追い込まれたりする。天皇賞の時期は調子を崩さないか念入りに気を

つけろ」

「肝に銘じる」

学園のトレーナーならヒヤリとする単語が山ほど並べ立てられていて、できることなら出走を回避したくなるような状況に見えたが、それでも絶対回避を言わなかったあたり、このレースはゴールドシップにとっても大変重要なものかもしれなかった。

「次はネイちゃんか。GI、特に有馬記念には何回でもチャレンジさせていい。うまく成長したらいくらでも勝てる。もし勝ちきれないにしても、過去の世界の状況から行けば、掲示板入りはし続けるくらい強くなるのは確実だ。デビュー前のやつだが、トウカイテイオーってのを知ってるか？　あいつと張り合って先着できるくらいにはなる」

トウカイテイオー、彼女の名前はその素質の高さの評判とともに時折小耳に挟むし、先ほどゴールドシップから渡された百人のウマ娘のリストにもしっかり記載されていた。距離適性や彼女本人が公言している路線的にもネイチャと真正面からぶつかることになるはずだった。

「そうか。よく研究しないとな。まだトレーナーはついていないようだが、どうする？

うちに勧誘するか？」
　俺の提案にゴールドシップは少し考え、首を横に振った。
「いんや。それはやめとく。過去に何回か引き込んでネイチャとチーム内でも張り合わせたんだが失敗した。ネイチャが早々にギブアップして、着順の定位置が頭から三着じゃなくてケツから三着になってしまったことが多かった」
「うーむ、確かにそれはいかんな」
「ネイちゃんは最低でもブロンズコレクターと呼ばれるくらいには強さを発揮してもらわなきゃいかん。逆ブロンズコレクターじゃゲームオーバーになっちまう。もちろん全戦全勝できるくらいの勢いがあればそっちの方がいい」
　同じフィールドで戦う相手がいる時に、その存在が切磋琢磨し合える良い関係になるか、スポイルされてしまって駄目になる、最悪共倒れになってしまうかは判断が非常に難しい。後者ならばお互いのためにも離れるべきだと思う。
「変わり種だとなんでか知らんがネイチャとテイオーが恋仲っぽくなっちまって、両方とも強くなったのはいいんだが、他がいろいろ噛み合わなくなって次のループにまっしぐらさ。他にもテイオーとマックイーンとデキてなぜかネイチャとも三角関係が成立しちまっ

て、やっぱりアタシの未来が爆発四散したこともあった。いろいろとありがちだから二人の距離はほどほどがいい」

「……よくわからんが、トウカイテイオーを同じチームに引き込むのはやめとこう」

「最後はベルちゃんだな。この世界だとトレーナー課程の方にいるから、アタシの今までの経験が参考にならない。ある意味出たとこ勝負になるが、この前のトレーニングの時の分析力が生きれば、うちのチームが無敵になるに違いない」

「ああ、中等部二年生になりたてであの観察力は素晴らしい。あれほどの力があるなら、体力があれば普通にレースも一流の走りができそうだが」

ゴールドシップの肝煎りで、半ば強引な手でチームに勧誘したメジロドーベルのことはとても気になっていた。研修コース・トレーナー課程の方にいる生徒のことは今までレースを走れるかどうかという視点で見たことがなかったため、データベースでも参照してみたことさえなかった。

「そういえば、なんでベルちゃんがレースの方を選ばなかったかは全く聞いてなかったな。もし体力なんかが他の世界のベルちゃんと変わらなかったら普通にＧＩ勝てるぞ。五

勝は堅い」
「そんなにか。いずれ折を見て聞いてみるか。あとはさり気なく体力測定もやってみたい」
「だな」

3　苫小牧（とまこまい）の星の青田買い

今の所属メンバーの大まかな方針を決めたところで、茶と茶菓子を出した。茶をすすり、菓子をつまみつつゴールドシップと引き続きのんびり駄弁（だべ）ること小一時間、そういえば新入生のヘッドハンティング計画をしていたことを思い出した。新入生は今頃入学式と学園説明が終わって解散となった頃合いだろうか。
「新入生の様子を見に行かないか？」
「そうだな。ホッコータルマエには早めに会っておきたい」

ゴールドシップとともに噴水広場の方に行ってみると、いつもは静かな場所に新入生や在校生が数多く集まり、大変賑やかだった。
「みんなキラキラしていて元気が出るな」
「そうだな。もう何年も学園で生徒を見てきているが、毎年この時期は新鮮な気持ちになる」
「さて、と……お、あそこにいるな」
ゴールドシップ曰く、中庭の端よりの方、同じクラスの子と思われるウマ娘と談笑している背が高めの子がホッコータルマエらしい。ちょうど別れて一人になり、彼女がベンチに座ったところで接近を試みた。
「こんにちは」
「あ、はい！　こんにちは。お二方は確か今朝、門のところで――」
やはり彼女は俺達のことを認識していた。ゴールドシップはあえて目立つように行動していたので、その甲斐があったというものだ。
「花屋兼ナゾのウマ娘ことゴールドシップだ。アタシのことをちゃんと見てたんだな」
「はい。なんで花屋さんがここにあるんだろう、って思ったのと、ゴールドシップさんの

姿が印象的だったので」
「そうかそうか。そういえばホッコータルマエさんは苫小牧出身だったな」
　ゴールドシップがさらりと彼女の名前と、大変重要な属性にしてまさに広報をしたいと日々頑張っている街の名前を述べた。その瞬間、彼女が目を見開いて瞬時に笑顔になり、ゴールドシップにずいっと接近した。
「どうしてゴールドシップさんが私の名前を知ってるんですか!?　というか苫小牧のこともご存じなんですか!?」
「ちょっと前に苫小牧を通った時にタルマエさんのポスターと立て看板を見たんだ。いやあ、やっぱりロコドルってすごいな」
　ゴールドシップの感想に、彼女は腰を九十度に曲げて頭を下げ、さらに目を輝かせて満面の笑顔でこちらを見た。
「ありがとうございます！　次はぜひ苫小牧を観光していってください！　お声かけいただけたら案内します!!」
「おう、その時はよろしくな。おっちゃんも行こうぜ」
「ええ、ぜひ」

「よろしくお願いします！」
そこまで挨拶をしたところで、タルマエがこちらを改めて見て小さく挙手をした。
「あの、もしかしてどこかのチームのトレーナーさんでしょうか？」
「はい。申し遅れました。私、ゴールドシップと組んでいる、チーム――」
「『自重』」
「――『(仮)』！　……コホン、そこのトレーナー、白江と申します」
「おっちゃんいい加減諦めろ。あれはメンバーの総意だ！　民主主義だ！」
ゴールドシップと睨み合いになったところで、ホッコータルマエが再びおずおずと挙手をするのが視界の端に映った。
「それってチーム名なんですか？」
「そうだぞ！」
困惑することしきりの彼女相手に追加の説明を試みた。
「理事長より頂いた言葉が、メンバーの圧倒的支持によりチーム名に採用されました。しかし少々奇妙過ぎるので私が孤軍奮闘して反対の論陣を張っているところです」
本当はトレーナーの職権で単独決定してしまってもいいのだが、きちんとチームメン

バーと話し合う姿勢を見せている点は評価してもらいたい。

「なんか、すごいですね……」

「チーム名については争いがありますが、それ以外の点では問題がないと自負しております。引き続き日々地道に努力していく所存です」

一礼して、さらに続けた。

「本日ホッコータルマエさんにお声かけしましたのは、我々のチームの存在を記憶の片隅にとどめていただき、近い将来、トゥインクル・シリーズに出られる際には当チームを選んでいただきたいと考えているためです」

その言葉に、彼女は目を白黒させて返事をした。

「あの、私はレースの道に来るのはこれが初めてで、もちろん全く実績がありません。それどころか、何かのイベントなどの時でさえ走ったことがありません。自分で言うのも悔(くや)しいんですが、ロコドルとしての知名度も苦小牧以外では全然なくて、札幌でさえあまり浸透していなかったくらい無名ですし……。チームなんてとても畏れ多くて……」

「我々が声を掛けたのは、いわば青田買(あおたが)いです。ホッコータルマエさんは類まれなるポテンシャルをお持ちだと見立てています。ロコドルとして苦小牧の広報活動をしていくこと

を重要な使命としていらっしゃることも、ウェブサイト等の記事を拝見して知りました。そのサポートもしたいと思っています」

初手でかなり突っ込んだ提案をしたが、これは掛け値なしの本心でもあった。街を背負って頑張る姿はぜひとも応援したい。

「ありがとうございます！　なんか突然すごくありがたい言葉を頂いて恐縮です。お礼といってはなんですが、こちらのハスカップをどうぞ！」

彼女が脇に置いてあった保冷バッグから小さめのタッパーを取り出した。その中には小さな、ブルーベリーみたいな果実が入っており、勧められるままに二人でそれぞれ一粒ずつつまんだ。

「うまいなこれ」

「美味しい」

「えへへ、ありがとうございます。まだいっぱいありますし、農家さんが通販で直販もしてくれていますのでぜひ」

「ありがとう。さっそく頼むことにします」

締めくくりとして、彼女への応援とともにチームの福利厚生（？）の宣伝もしておいた。
「入学後しばらくは基礎講義と基礎トレーニングが続きますが、それらを通して少しずつ力をつけていってください。時間があればいつでも私どものチームトレーナー室に遊びにきてください。日によってはイラストや漫画を描くスタジオになっていたりしますし、お茶会が開かれているかもしれません」
「ありがとうございます」
「こっちからもホッコータルマエさんのところに遊びに行くぜ」
「ホッコータルマエ、で大丈夫です。先輩に『さん』付けされるのはちょっと落ち着かなくて」
「そっか、じゃあタルタル」
「……タルマエでお願いします」
食べ物の名前のような省略の仕方をしたゴールドシップの命名に、タルマエは苦笑いでやんわりと否定の意を返していた。

4　にんじん畑の記憶

ホッコータルマエと別れ、一応ネオユニヴァースがいないか探してみたものの見つからなかったので、のんびり散歩モードに移った。

「いい陽気だ。昼寝したくなる」

「昼寝すっか。六百年くらい使ってる最高の昼寝場所を知ってるぜ。そこでの総睡眠時間は通算三十年だ」

「すごい売り文句だな……」

ゴールドシップお墨付きの昼寝場所は、広大なにんじん畑の片隅、ちょうど木陰になっているところだった。今の理事長になってからはにんじん畑の運営が再開されて専任の職員がつき、さらにこの春からはイベント企画で生徒も参加した菜園運営も行われることが決まっている。にんじん畑の隣では昨年から整備していた新しい畑が植え付けを待ってい

た。計画では四つのエリアに分けてジャカイモやにんにく、唐辛子、いちごを育てるらしい。

そこに二人揃って寝転がると、ちょうど心地よい風が吹いた。

「六百年っつうところから分かるかもしんねえけどさ……ここに来ると今でも思い出しちまうし、もしかしてひょっこり顔を出してくれたり、なんてバカみたいなことを考えちまう。もう何をどうやっても絶対に会えないって分かってるのによ」

彼女は思い出す相手が誰であるかは語らなかった。語らずとも分かった。

「――やっぱり、今も過去のあの世界のメジロドーベルが好きなのか？」

ふと口をついて出てしまった問いが、あまりにも不躾に過ぎるものだと気づいた時は手遅れだった。でも、ゴールドシップは怒ったりせず、ただ哀しげな声で「ああ」と小さく返した。

「そうだな……あの世界のベルちゃんが、今も好きだ。あの時から数えてももう体感で六百年近く経っちまったが、今も忘れられない」

「すまない」

俺の謝罪に、彼女が軽く手を挙げてひらひらと振るのが見えた。
「この際だ、最後まで喋らせてくれ。むしろ感情の捌け口にしてしまってすまん」
「……わかった。最後まで付き合う」
「ありがとな」

次の言葉が届くまで、しばらく間があった。

「実はさ、今でも夜中に時々フラッシュバックみたいになって泣きたくなるんだよな。ここまででも何回も、その世界の『メジロドーベル』に出会って、仲良くしたり、しなかったり、できなかったりした。ベルちゃんのことを意図的に遠ざけてきた時期もあったんだが、そんな時でもつい面影を重ねてしまってさ、……告白をしたり、告白を受け入れたりした。そしてそれをやっちまったどの世界でも、結局ベルちゃんを不幸にしてしまった。今でもとても悪いことをしたって後悔してる。もう何をどうやっても声すら届かねえけど」
「そうか……」

「まあ、言っちまえば未練たらたらさ。今回、ここで久々にまた、ここのベルちゃんにあのベルちゃんを重ねてしまった。歳の差があの時と同じ感じなんだよ。最初にアタシ自身が苦しくなって、それからここのベルちゃんに申し訳なくなった。……我慢しきれなくて何度となくアプローチしているのは確かにここのベルちゃんだけど、無意識のうちにあのベルちゃんのことを見ているのかもしれない。ひでえ女だろアタシ」

「そんなことは無いぞ」

反射的にゴールドシップの言を否定した。それから、初めてこの話を聞いた時から考えてきたことを彼女に伝えた。

「あー……、確かにある子を見ながら、そこにいない子のことを考えてしまうのはあんまり良くはないとは思うんだが、それでも一人の、しかももう二度と出会えない相手のことを六百年想い続けるってのは、織姫と彦星みたいだって思った。長い長い伝説級の偉業だ。俺なんかは高々三十代、彼女なんていたことないから、恋というものはよくわからんが、……ここのドーベルに過去の姿を重ねてしまうのも無理はないかもしれん。声も姿も歳の差も同じなんだろ？」

「でもよ……」

「だから、ここのドーベルのことを今からよく知ったらといいと思うぞ。過去のドーベルと混ぜてしまわないように、この世界のドーベルとして見ることができるように。もちろん、それで改めてここのドーベルを好きになるかどうかだったり、逆に向こうから告白された時に、ここのドーベルと付き合うかどうかは、その時のゴールドシップ自身に任せたらいいんじゃないか」

俺の感想とアドバイスめいたものに、ゴールドシップは少し明るい声で返事をくれた。

「そっか……そうだな。おっちゃん、やっぱアンタ最高だよ。あの世界のベルちゃんの次に好きだ」

「そりゃどうも」

「ちなみに好きランキング三位はその世界のマックイーン、次点でそこのベルちゃんのトレーナーだ」

「二位か。ずいぶん高く評価してくれるんだな」

「ちょっと楽になったお礼だ。ありがたく受け取っときな」

「ういっす」

話の後、ポカポカ陽気にまどろんでいたら、あっという間に二時間が経ってしまっていた。そして、ゴールドシップと反対側の隣に、真新しい制服の生徒が昼寝をしているのに気づいた。ゴールドシップが身体を起こしたのとほぼ同時に、その子が小さな唸り声を上げながら身じろぎした。

「おはよう諸君。ゴルゴルイブニングヘッドラインの時間であるぞ……」

「――ふぁい？　……え？　あっ！」

ゴールドシップの厳(おごそ)かなトンチキ宣言に、真新しい制服の子はそのままどこかに飛び出さんばかりの勢いで跳ねた。

「急に隣にごめんなさい！　お二人がとても気持ち良さそうに寝てたんで、つい……」

「新入生ですか？」

俺の問いに、彼女は笑顔で答えた。

「はい！　今日入学したラインクラフトって言います！　よろしくお願いします！」

「よろしく」

「よろしく！　その稲妻アホ毛イカしてるな！」

「ありがとうございます！　この跳ねてるところは自慢なんです！　……でもアホ毛じゃ

ないです……」
「すまんすまん。ま、今後ともよろしく。アタシの名前はいずれまわりから聞こえてくるだろう、フォッフォッフォ」
「わざわざもったいぶることじゃないだろ、ゴールドシップ」
「あっ、せっかくミステリアスなウマ娘になってやろうと思ったのにひでえ！」
「ミステリアスじゃなくて存在自体がミステリーだよお前さんは」
「あははっ、何だか楽しそうですね！」
つい言い争いになってしまったが、彼女――ラインクラフトが笑っていたのでよしとしよう。

「さようなら！」
「じゃあな～」
ラインクラフトを見送り、俺達もそろそろ帰宅することにした。
「ゴールドシップ」
「何だ？」

「さっきの子も、ゴールドシップがくれたリストの中に名前があったよな」
「ああ。あいつも世界をまたぐ的な感じの現象の当事者っぽいことになる世界があるから要注目だ。ここで会えるとは思わなかったが、いろいろと解明する手助けになる」
「なるほどな」
「ま、ぼちぼちやってこうぜ」
チーム勝利を目指しつつ、ゴールドシップの目標を果たす。少しずつではあるが、活動が進み始めた。

「ところでおっちゃん」
「どうした？」
「クラフトのアホ毛って稲妻っていうよりエリンギっぽくね？」
そう言われて思い返した瞬間、もはやそうとしか見えなくなってしまった。どうしてくれる。

5　新年度第一回チームミーティング

金曜日の午後に新年度第一回目のチームミーティングを開いた。諸々の書類を出しに行ってトレーナー室に戻ってくると、メンバーが勢揃いしていた。買ってきた茶菓子を一、二、三、四、五、六、……あれ？

「なんか多くないか？」

みんなの顔を改めて見渡すと、数日前は見なかった少し小柄な生徒が二名並んでいた。

「こんにちは……」

「お邪魔してます」

どことなく悠然（ゆうぜん）とした雰囲気を漂わせているマイペースそうな子と、そのお目付（めつけ）役みたいな子がぴょこんと頭を下げた。制服の学年章によれば中等部一年生らしい。

「そうか、あの日はちょうどおっちゃんと入れ替わりだったな。この二人がアタシのファ

ンクラブを作ったって子だよ」

内心驚いていると、マックイーンとネイチャも同様のことを思ったらしく、驚きの表情を浮かべていた。一方でドーベルは何の話だか分からない、というような感じで困惑していた。

「君達が話に出てた子だったのか。あの時は入学前にファンクラブ結成の話をしにきてたってこと？」

「はい……。入学前に新しい制服を着て学園に忍び込んだ、というやつです……」

「ごめんなさいっ！」

「新入生なら多少はフライングしてもバチは当たらないと思う。トレセン学園へようこそ」

俺の言葉に新入生二人が会釈し、その横でゴールドシップが我が意を得たりと大きく頷いていた。マックイーンやネイチャ、ドーベルも感嘆を織り交ぜながら二人への三者三様の感想をもらした。

「あの時はお二人とも非常に堂々としていらっしゃいましたから、私やネイチャさんの学年でないなら、一つ下のドーベルと同じだと勝手に思っておりましたが、まさかの入学前

だったとは」

「制服が妙にパリッて整ってるなってのは思ったんだけど、ご家庭で制服を整えるよう言われてるのかなってあまり気にしてなかったんだよね。この学校って名家のお嬢様達がいっぱいいるからさ。ここにまさに二名ほどいるけど。忍び込んでいたとは脱帽ですなー」

「なんかとても勇気があるというか、堂々と振る舞えるのは、ちょっとうらやましいかも」

三人の感想に、マイペースそうな子はしたり顔で頷いていた。

「もっと褒めてくれてもいいんですよ……えへん」

「こら、ユーちゃん！」

ゴールドシップのファンクラブを作る子達だけあって、なんだか一癖ありそうな感じだった。

「改めまして……ゴールドシップさんのファンクラブ……『ゴールドシップ・クルー・クラブ』、会員番号一番のユーバーレーベンと申します……」

「同じく二番のウインキートスと申します！　二人とも中等部一年です！」
「よろしく」
第一回ミーティングは初手からゲスト二名を迎えることになった。

「新年度になったので、レース組はいよいよデビューに向けて本格的なトレーニング活動を行っていくことになる。研修コースの側でも実地研修などより実践的なカリキュラムに移っていくから、結構忙しくなると思う。ドーベルはトレーナー課程の方の活動を頑張ってもらうとして、レース組は大まかな方針を立ててみた。今までに尋ねた進路希望と、データからの見立て、それに――」
「アタシの七百年間の観察記録から導き出した必勝法則も材料にして一緒に計画を立てたぞ！」
自分が言う前にゴールドシップが先に言ってしまった。普通であれば、トレーナーではなく一介の生徒がトレーニングの大方針立案の一角を担うなどおよそあり得ないことだが、ゴールドシップは過去の経験が誰も及ばないほど豊富、本人のアスリートとしての能力も一流、真面目さにステータスを振れば一流のトレーナーとしての能力も持っている。

それらの力を活用すれば、トレーナー相手であっても有用な議論をすることができるし、生徒という立場でなければ最上級のリーダーになるに違いなかった。

「ま、ゴルシ師匠とトレーナーさんがタッグを組んだらすごいプランができそうだね～」

「おうよ！　ネイちゃんを毎回ウイニングライブのセンターに立たせるから、二年生のレッスンではセンターパフォーマンスに役立つ奴をじっくりやっとけよ！」

「え、いやいやいやいやいや！　アタシがセンターなんてそんな……」

「ネイチャならできると信じている。頑張ろう」

ゴールドシップの宣言にたじろいだところに、俺がさらに押した効果は抜群だったようで、しばらく顔を真っ赤にして固まっていたネイチャはこくんと頷いた。

それから各メンバーのここまでの体力測定の結果を元にした三年間の計画を伝え、理解を得た。

「うちは今のところ芝路線の中長距離コースが目標になっているメンバーが多いが、この先の構想ではそれに限らず幅広い距離適性、さらにダート路線の子も受け入れることを視野に入れている。様々な適性の子をお互いに知ることは、必ず我々の力になる。ドーベル

も時間があるときには実践的なトレーニング指導に活かせそうなことを学び取ってほしい。頑張っていこう」

「はい」

「ええ」

「頑張りますよ～」

「がんばります……」

「頑張りますっ」

返事が揃わず、みんなそれぞれに述べているのがうちのチームらしいが、それはさておき。

「一緒に返事をくれたユーバーレーベンさんとウインキートスさんは基礎を頑張ってね」

チーム所属となるはるか前の新入生二名には基礎学習を勧めた。

6　オールラウンダー候補の引き受け

第一回ミーティングから数日、次回のチーム合同トレーニングとともに、できればチーム名をこっそり変えたいとトレーナー室で頭を悩ませていたところ、知り合いのトレーナーが訪ねてきた。

「白江、折り入って頼みがある」

聞かされた話は大変な驚きで、かなり重めの話だった。

いわく、母親が急病で倒れ、家族で面倒を見ることになった。学園を長期間、下手したら年単位で空けることになるかもしれない。だからメイクデビューに向けてトレーニングを始めたばかりの生徒を引き受けてくれないか、とのことだった。

「お前のところで預かっている子って……」

「アグネスデジタルだ。ご存知の通りなかなか変わった子でもあるし、彼女の悩みの解決

策として俺が提案した『芝もダートもこなすオールラウンダーになる』という目標をそのまま受け入れて、さらに育てる腕もあるトレーナーを思い浮かべたら、白江しか挙がらなかった。

「なるほどな……」

アグネスデジタル。彼女もまた類まれなる才能の持ち主であるが、同志というべきウマ娘の皆を崇拝に近いほどの熱意で愛するあまり、活躍の方向を決めることを躊躇(ちゅうちょ)して、未出走のまま引退しかねない状況にあった。その彼女に道を指し示して、トゥインクル・シリーズでデビューする決心をさせたのが目の前にいる彼だった。

「俺の都合で彼女の選手生命を閉ざしてしまいたくはないんだ。デジタルは成長途上だが、必ず強くなると確信している。だから頼む！」

話を聞いた瞬間から断る意思など毛頭なかった。トレセン学園のトレーナーは常に生徒第一でなければならない。幸いにしてこちらには新しいメンバーを受け入れる余裕もあるし、指導も可能だと自負している。

「わかった」

「ありがとう！　恩に着る！」

彼女も交じえての面談のスケジュールを決め、移籍が決定した時の学園への報告事務処理を確認してお開きとした。

彼とほぼ入れ替わるようにゴールドシップが座学の授業時間を盛大に無視してやって来た時に、アグネスデジタルのことを伝えた。

「マジか。……おっちゃん、必ず迎え入れるぞ。なんならデジたんを簀巻(すま)きにしてでもここに確保だ」

「今度こそ俺達がまとめて法廷送りになるぞ。強攻策を取らずとも、うちのチーム体制と福利厚生を説明したら勧誘に成功するはずだ」

「期待してるぞ」

しばらくして授業時間が終わった後、他のチームメンバーが揃ったが、アグネスデジタルの件はひとまず伏せておいた。ちなみに、ゴールドシップは授業をサボっていたことがマックイーンにバレて制裁を受けた。何やら骨がミシミシ言っているような音が聞こえてくるバイオレンスな光景が繰り広げられた。

「ギブギブ！　本当に死んじまう！　先輩をボコるなんて反則だぞ！」

「あら、ゴールドシップさんが自ら仰(おっしゃ)っていたではありませんか。別の世界では貴女は私の孫であると。ならば孫の不始末は再教育せねばなりません」
「メジロの婆様みたいな口調と怖さアダダダダダダダ！」
「反省してくださいませ」

数日後、小さめの会議室で生徒育成支援課の職員、アグネスデジタル、彼女の現トレーナー、俺の四名で面談が開かれた。一通りの状況説明の後、俺からデジタルに現時点での決意について話した。
「アグネスデジタルさんが今のトレーナーとともに掲げた目標については彼から伺っています。私はその目標に賛同し、彼がしばらく抜けている間、その実現に向けてともに努力したいと考えています」
「本当ですか!?　あ……すみません……。あたしの目標って、自分で言うのもなんですけど、とんでもないことだと思うんです。芝とダートの両方で走ろうと思う子なんて、あたしがずっと調べてきても全然いませんでしたし、今のトレーナーさんが両方やろうって言ってくれたがとても嬉しかったんです。だから、もしこの先もあたしの目標をそのまま

追いかけていいんでしたら、これほど嬉しいことはありませんっ！」
　デジタルの半ば叫ぶような告白に、俺はその目を見て、深く頷いて返した。これで話がまとまる……と思ったら、保留条件がつくことになった。
「――でも、一旦、これを機にあたしの道をもう一度見つめ直したいとも思いました。わがままを言ってすみません。トゥインクル・シリーズへの道を辞めることは絶対ありませんが、……少し時間をください」
　少し考え、その提案を受け入れた。
「分かりました。道をもう一度見据えることは大変重要です」
　生徒育成支援課からの見解は、トレーナー契約を解消してトレーナーがつかない状態に戻る状況は通常でもあり得るため、後任が定まらなくても現トレーナーの休業による契約終了は制約はないとのことだった。
「しかしながら、トレーナーがついていない状況ですとデビューができず、トレーニングにも制約が生じてしまうため、後任未定は望ましいことではありません。過去の事例ですと、大規模なチームに一時的に籍を置いた状態にする、いわば『仮所属』とも呼べるような形を取った事例はあります。とはいえ、空白期間はもちろん短い方がいいですから、正

式な契約が直ちに結ばれることが望ましいことに変わりはありません」
　それは、ウマ娘がトゥインクル・シリーズを戦えるレベルの体力を保てる期間が長くないこと、その期間を空費しては長い人生への影響も大変大きなものとなってしまうから、当然の要請だった。我ら大人は、彼女達の才能を決して潰してはならない。
　しばし考え、ひとつの案を提示した。
「アグネスデジタルさん。当チームへしばらく籍を置いてみませんか」
「え、あ、……」
「デジタルさんの理想の道へ進む準備を整えるまでの止まり木として、当チームを使ってください。そのまま我々の仲間になってくれるのが最も嬉しいのですが、もちろん他のトレーナーとともに道を進む選択でも構いません。才能は決して取りこぼして、腐らせてはならない。それは私だけでなくこの学園の、いえ、全世界のトレーナーも必ずやその認識で一致するでしょう」
　しばらく静寂が支配した部屋に、アグネスデジタルの声が響いた。
「中途半端ですみませんが……仮所属、という形で置いていただけないでしょうか……」

「ありがとうございます。私と、私のチームはアグネスデジタルさんを歓迎します。道を定めるその日まで、願わくばその先も、デジタルさんを最大限支援します」

話がまとまった。生徒育成支援課の手配で今週中には学園の事務手続きが完了するとのことだった。デジタルには早速現トレーナーともども、我らがチームトレーナー室に来てもらうことにした。

「お邪魔しまーす……」

「この部屋、なんか前年度よりもずいぶん賑やかなことになってんな。いろいろな物とか、飾りつけとか」

「タイミング的にちょうどメンバーが総入れ替えになったんだが、今年は一癖どころか一人七癖ありそうなメンバーばかり集まってな。デジタルさんを置き去りにしてノリにノってどこかに行かないよう注意する」

「そのへんは心配ないぞ。デジタルも一癖、七癖どころか四十八癖あるから。……入学式の時も世話になったな。ぶっ倒れたデジタルを運んでくれたことに感謝する」

「その節は大変ご迷惑をお掛けしました……」

入学式の日のことを思い出した。さらにその前にいろいろ伝え聞いた噂話も。ならば心配はいらないかもしれない。

チームメンバーとの顔合わせは早速明日に決め、トレーナー室の各種設備の説明に移った。とはいえ説明しておきたいのは実質的にはひとつだけだった。

「あ、あの……なんでこんなものが、というより正式所属でもないのに使ってもいいんですか……？」

「うわっ！　お前よくこんな設備の設置申請通せたな！　もしかしてお前の口座スッカラカンになっちまったか!?」

「いや。元は理事長のポケットマネーだったんだが、理事長が決裁文書を隠そうとした時にたづなさんにバレて俺ともどもこっぴどく怒られて、いろいろあってちゃんと学園の正式な予算での設備になった」

「すごいスタジオ設備なのは確かなんだが、いやでもこの作画環境をどうやって正式な設備だってことにしたんだ？　どう考えても学園の活動と関連付けられないんだが」

「ＵＲＡとトレセン学園の広報にイラストや漫画をふんだんに取り入れるプロジェクトを思いきりぶち上げた」

「うーん、でも普通は『外部企業に依頼して製作してもらったほうがいい』って言われないか？」

「俺がプレゼンした時もそんな空気だった。でもその後の理事会で理事長が何か大演説をしてくれたのかもしれん。次の日には学園の備品シールが一式分届いた」

「うおう、備品シールをきっちり送ってくるあたりは、さすがお役所の出先機関そのものの事務だ」

「まあ、何にせよ堂々とこれを使って活動できるようになったから、あとはきちんと宣言通りのものを実現すれば監査だって敵じゃない」

「こういうところはまさにオトナな世界……」

トレーナーどうし、お役所的世知辛さを語っていたせいで、主役であるはずのアグネスデジタルが先ほどから一言も発していないことに気づくのが遅れた。

「ん？　デジタルさん？」

「おーい、デジタル？　デジたん？　おデジさん？？　……だめだこりゃ、意識が完全に吹っ飛んでしまってるな」

安らかな笑顔を浮かべて微動だにしないデジタルをソファに運搬して寝かせた。しばら

くして意識を取り戻した彼女が五体投地で土下座しようとしたため押しとどめ、設備の説明を再開した。

「ふおおおおおおおおおおお！！！　何度見てもすごい設備がここに!!　じゅるり……」

「デジタルさんにはこちらの設備を自在に活用して活動していただければと思います。もちろん、上への報告のため、とあるプロジェクトにご協力いただくという取引条件がありますが、当チームとの正式な契約を強制することはありません」

「プロジェクトやります！　協力します！　自分やれます！」

「デジタル、白紙委任状を出すんじゃない。こいつはどんな悪徳行為をさせるか分からんぞ」

「おいこら」

人を悪の組織の首魁（しゅかい）みたいに言うんじゃない。

「我がチームでは、この設備を早速一人に使ってもらっています。中等部二年、研修コース・トレーナー課程所属のメジロドーベルという子です」

俺の言葉に、アグネスデジタルが飛び跳ねるくらいに激しく動揺した。

「メジロ、ドーベル、しゃん……どぼめじろうせんせい……」

彼女はドーベルのペンネームを口走った。やはり知っているか。

「ご存知ですか」

「ええ、存じてますとも！　最近某イラスト投稿サイトに颯爽と現れた漫画が超絶うまいアマチュア作家様！　プロフィールは何の変哲もないけれど、描かれている内容からはお嬢様の雰囲気が否応なくにじみ出ている！　トレセン学園にいるか、そうした方がまわりにいないと描けないような微に入り細を穿つ表現多数！　不肖デジタル、先生を丹念に追うこと約半年にしてついにその先生がまさかの同学年のドーベルしゃんだと突き止めることができたのであります!!　……あ、すみません興奮しすぎました……ヲタクストーカー罪での逮捕はご勘弁ください……」

「デジタル……そこまでやってたのか」

「ああっ同志トレーナーさん！　最後の最後にそんなにドン引きしないでください！」

「白江。さすがに擁護しようがないレベルの変態だったかもしれんが、どうか見捨てないでやってくれ」

「大丈夫だ、問題ない」

これは本心だった。確かに絵から本人を突き止めてしまうほどの探偵力は悪用すると危

険だが、他の子や他のチームの状況を観察して教えてもらったら、強くするためのヒントが大いに得られるに違いない。

「何かありましたらあたしを遠慮なくたづなさんに引き渡してください……」

「まあ、デジタルさんより様々な方向性で危ない子は学園にたくさんいますので、特に気になさらずともよいかと思いますが」

「はいい……」

改めて、明日のミーティングに顔を出してほしい旨を伝え、アグネスデジタルと、この先しばらく休業となる彼女の現トレーナーと別れた。

7　第二回チームミーティング

翌日午後、チームトレーナー室にメンバーが揃った。ゴールドシップ、メジロマックイーン、ナイスネイチャ、メジロドーベル、そしてアグネスデジタル。

「今日から、うちのチームで『仮所属』として預かることになった、中等部二年のアグネスデジタルさんだ」

「仮所属？」

ネイチャが首をひねった。マックイーンとドーベルも同様で、ゴールドシップに至っては『何だよ連れてきたと思ったらちゃんと引き込めてねえのかよ説明しろ』と無言の圧をかけてきていた。

「経緯を説明する。もともと彼女は昨年秋頃に他のトレーナーと契約して、ここまでトレーニングをしてきた。でもそのトレーナーが家の事情で最低一年はトレーナーを休業せざるを得なくなってしまった」

「そういうことってやっぱりあるんですねー……」

ネイチャがつぶやいた。マックイーンとドーベルも神妙な顔をしていた。ゴールドシップには事前にここまでの話は共有していたので、彼女からの反応は特になかった。

「彼女がそのトレーナーと目指している道は前人未到だが、俺はそれを最大限支援し、実現する。ただ、デジタルさんはこれを機にもう一度道を見つめ直したいとのことだったし、かといって誰ともトレーナー契約を結んでいない状態になるとトレーニングどころ

じゃなくなるから、ひとまず『仮所属』を提案して、うちに来てもらった」
「なるほど……」
簡単な説明だが、メンバーは状況を一応理解したようだった。少なくともゴールドシップが納得してうんうんと頷いているのでよし。
「ご紹介いただきました、中等部二年のアグネスデジタルと申しましゅ、……すみません噛みました。しばらくこちらにお世話になります。あの、部屋の片隅で小さく透明人間のようになってますのでどうか皆様お気になさらずご活動ください……」
「いやいやいやいやデジたんはセンターだ！　玉座はあっちのスタジオだオッラーン！　ちゃんとアリスデジタル先生としてそこのどぼめじろう先生とともに活躍を――」
明らかに話を迅速を通り越して超特急で進めるために、横から無理やり秘密を全開示する作戦に走ったゴールドシップの一声に、二人が反応を見せた。
「あわわわわわわ！！！！　どぼ先生の前であたしのペンネームは！」
「えっ!?　アリス先生、え、アタシのペンネーム、え……？」
激しく混乱するデジタルと、茫然自失の状態に陥ったドーベルを見て、瞬間的に状況を悟ったマックイーンがゴールドシップを制裁した。

「あだだだだだ！　やべっそこは死んじまっ」
「また良からぬ企(たくら)みをしたことは明らかです。前回の反省が足りなかったようですわね」

数分後、それぞれ別々の理由で魂が抜けた三人を前に仕切り直しとなった。
「改めまして、アグネスデジタルです……先生のお噂はかねがね……」
「メジロドーベルです。アリス先生には常々感銘を受けておりまして……」
「あのー、これは何の会合なんでしょうかねトレーナーさん？」
同好の士ということになるらしい二人の会話がたどたどしく進む中、ネイチャが苦笑いを浮かべながら尋ねてきたものの、俺としてもどうしたものか判断がつかなかった。
「実はこの私デジタル、僭越(せんえつ)ながら夏の有明の祭典に出展の申し込みをしておりまして、当選の暁には、もしどぼ先生がサークル参加なるものにご興味がありますならば、ぜひとも共に参加していただき、さらに思し召しがありますならば、先生のご作品を同人誌として頒布(はんぷ)するということを提案いたしたく……」
「本当ですか!?　実は昔から興味はあったんですが、一人だと自信がなくて、かといってまわりに一緒に参加してくれる人もいなくて」

「おお！　当選発表はもうしばらく先ですが、ぜひともともに参りましょうぞ！」
「よろしくお願いします！」
よく分からないが、とりあえず何らかの約束が成立したらしい。
「ドーベルに趣味を同じくする仲間が増えたようで何よりですわ」
「よし！　じゃあ二人のために夏と冬のスケジュールはガバっと空けて何一つ邪魔が入らないようアタシが取り仕切るぞ！　おっちゃん、ロイヤルビタージュースをロイヤルスウィートジュースにする改良を今から始めっぞ！　デジたんとベルちゃんが二徹三徹で原稿を描いても大丈夫なように！」
「熱意は分かったが、それよりも優先度が高いやるべきことはたくさんある。トレーニング計画とか出走計画とか、いろいろな」
いつの間にか復活して前のめり気味に切り込んできたゴールドシップを適当にいなしつつ、まずは直近のスケジュールについて話すことにした。
「しばらくはチームでの基礎トレーニングや併走トレーニングをしていく。春季のＧＩレースがもうすぐ始まるから、そうだな……ダービーは俺がみんなの分の枠を申請して

確保する。あとは適宜見学に行こう。遠くに行きたいなら引率するから早めに教えてほしい」
「なるほどねえ」
「承知いたしました」
「ドーベルはトレーナー課程の座学、実習がだいぶ詰まってくると思うから、空き時間がある時にチームでのトレーニングに顔を出してくれると嬉しい」
「わかりました」
「アグネスデジタルさんは良いトレーナーを探すためにも、選抜レースへの再参加の検討もしていきましょう」
「はいっ」
「アタシはアタシは？？」
「処分を食らいすぎて、トラック整備や菜園管理の職員さん方にご迷惑をお掛けしないように。……あちらさんは腕がいいって喜んでくれてるからその点はいいけれども」
「一流の整備は任せろ！」
「レースに取り組もうな……」

話が一段落して、そういえばきちんとした自己紹介をお互いにしていなかったことを思い出した。
「デジタルさんのために改めて自己紹介をきちんとしないとな。トレーナーの白江です。どうぞよろしく」
「チーム総監督のキャプテン・ゴルシだ！　年齢は十七歳だったり七百歳だったりするぜ」
「メジロマックイーンと申します。この春に中等部三年になりました。どうぞよろしくお願いいたします」
「ナイスネイチャです。マックイーンと同じで中等部三年。ま、ゆるっと一歩ずつまたやってきましょー」
「中等部二年のメジロドーベルです。トレーナーから話があった通りで、みんなとは違ってトレーナーになる方を専門にする課程にいます。だから別行動になることが多いかもしれません。よろしくお願いします」
「アグネスデジタルです……。中等部二年ですのでドーベルさんと一緒みたいでしゅ、

あ、また噛みました……」
「あと、中等部一年の子がここに遊びに来るかもしれない。ホッコータルマエさん、ユーバーレーベンさん、ウインキートスさんの三名」
「ずいぶん大所帯なんですね」
「いずれ世界征服を果たす秘密結社だからな！」
「そのような予定はございません」
ゴールドシップの謎の宣言は即座にマックイーンによって否定された。

第二回ミーティング終了後、ドーベルとデジタルは早速スタジオのエリアに移動して、二人で顔を突き合わせて今後の趣味的計画を練り始めた。それぞれネット上での存在と作品は認知していたのもあってか、内気なように見えたドーベルにしてはかなり早く打ち解けていて、初めて見る明るさたっぷりの笑顔を浮かべていた。
その様子を眺めていると、ゴールドシップがそばに寄ってきてぽつりと話した。
「やっぱり、同じ趣味の子といるとめっちゃ明るくなるんだな。あんな嬉しそうな顔のベルちゃんは、少なくともアタシが直接見たのは初めてだな」

「そうか」
「ああいう顔を見てると、やっぱり、好きだなって再認識するわ」
そう語るゴールドシップの横顔はとても穏やかで、俺は思わず心を奪われた。

第六章　ゴールドシップ・クルー・クラブ　第四回定例会

ＧＣＣ　ゴールドシップ・クルー・クラブ　第四回定例会

場所　チーム『自重（仮）』トレーナー室の応接スペース
時間　十六時三十分〜
参加者
・チームリーダー　会員番号　一番　ユーバーレーベン
・サブリーダー＆書記　会員番号　二番　ウインキートス
・悩める人　トレーナー　白江
・ファイター　会員番号　？番　メジロマックイーン

「本日はお忙しい中お集まりいただき……ありがとうございます。ゴールドシップ・クルー・クラブ、第四回定例会を始めます……ぱちぱち～……」
「今日もいつものあいさつ文だねユーちゃん」

ある日の放課後、チームトレーナー室に大量の荷物とともにふらりと現れた、中等部一年のユーバーレーベンさんとウインキートスさんがおもむろに会合を始めた。
「確かに自由に来ていいとは言ったが、さも当然のような顔をしてトレーナー室の一角に大量の資料を持ち込んで占拠しているのはどう捉えたものか。ところで第四回ってことはもう三回は会合をやったのか？」
俺が二人に対して質問すると、ユーバーレーベンさんがおもむろに近くの分厚い資料を指し示した。
「ええ……詳しくはそこにある会議録をお読みください……」
「辞書にしか見えないんだが」

「愛は……熱く、……そして厚くなるものです……」
「あ、あはははは……いろいろまとめていたらつい熱が入って、いっぱい書いてしまいまして……」
相変わらず悠然とした振る舞いのユーバーレーベンさんのお世話（？）をするウインキートスさんも、もしかしたら結構変わった子なのかもしれないと思いつつ、二人にお茶を出した。

「さて……本日お越しいただきましたのは、ゴールドシップさんが所属するチームのトレーナーさんです……」
「えっと、そもそも『お越しいただき』じゃなくて、君達がこの部屋に来たんじゃないかな？　ここのスペースに呼びつけたのも君達だし」
「そのあたりは諸説あります」
「諸説ありで流さないでほしいんだが」
部屋の主は俺であるはずなのに、なぜか訪問客扱いされてしまっていた。その指摘を二人は意に介することなく、ウインキートスさんに至っては積極的に受け流そうと俺を半ば

無視して話を続けた。

「さてまずはこの質問です。トレーナーさんのチームの名前が『自重』だという噂が学園中に流れていますが、これは本当でしょうか？」

「チーム名は確かにメンバーの総意でそれになってしまったけど、『(仮)』だからもうすぐ変わる」

折に触れてこのことを主張しているが、今回はその言葉に対してユーバーレーベンさんが意味深長な笑みを見せた。

「ほう……我々が敬愛するゴールドシップさんからは……、トレーナーさんが……チーム名改称を口にしたら……ある作戦を発動するようにとの……指令を受けております……。そこに隠してあるお菓子の山を……とある御方に遠慮なく勧めてパクパクさせよ、と……」

「頼むから仕事を増やさないでくれませんか。マックイーンに突然体重増減が出たら調整が大変なんだ」

「私は誰、とは言いませんでしたよ……？　マックイーンさんにも少々ご報告せねば……」

「トレーナーさん、語るに落ちちゃいましたね……」
引っ掛かった。普段ゴールドシップに対して行われている制裁が万が一こちらに飛んできたら、おそらく今季絶望、トレーナー休業に陥るかもしれない。ニヤニヤ笑いを浮かべるユーバーレーベンさんに対して白旗を掲げた。
「我々は平和にして友好的な関係を発展的に築く交渉ができると固く信じている。交渉条件は何かな？」
「誠意は……高級スイーツの形をしていると……、ゴールドシップさんから教えを受けております……」
「ただちに手配しよう」
中等部の生徒と和平交渉をするトレーナーはなんだか情けない気もしたが、円滑なるチーム運営こそが至上命題なので、そのためには何でもする所存だった。
「でもユーちゃんもあんまり食べないほうがいいんじゃないかな？　確か体重増減がわりと激しいんじゃなかったっけ？　先週言ってなかった？」
ウインキートスさんの爆弾発言に、ユーバーレーベンさんが一層笑みを深めた。
「記憶にございません……あるいは、情報漏洩の犯人として……キートスちゃんの記憶を

消します……ついでにトレーナーさんの記憶も……」

ゆらり、と禍々しいオーラが立ち昇った。ユーバーレーベンさんはおもむろに立ち上がるとスペースから少し離れて、誰もいない空間に向けて高速で拳を繰り出し始めた。

「ごめん！　だからその頭を全力で撃ち抜く勢いのシャドーボクシングはやめてほしいかなーって……ユーちゃんと和平交渉をしたいな」

「誠意は……高級スイーツの形をしていると……、ゴールドシップさんから教えを受けております……」

その言葉を受けたウインキートスさんは笑顔のまま固まり、しばらくして力なくつぶやいた。

「……ユーちゃん、今度駅前のカフェに行こっか」

「話が早くて助かります……うふふ……」

財布の中身やスマートフォンの画面を見て涙を流すウインキートスさんに同情した。察するに、お金がかなり飛んで消えそうな感があった。

「さて……、トレーナーさんに……質問その二です……」

「何かな？」
「ずばり……私達に対するイメージを……お答えください……」
「変」
口をついて出た言葉は最大の禁句だったらしい。場の雰囲気が一変した。二人の表情は変わらないが、圧が物凄く強くなった。まずい。
「……言い残すことは……それだけですか……？」
「ユーちゃん、穴を掘るのと物を運ぶのは任せて」
ユーバーレーベンさんは笑顔なのに背景に阿修羅（あしゅら）が浮かんでいるように見え、ウインキートスさんも笑顔でこちらをロックオンしつつ、どう考えてもオーラが獰猛（どうもう）なライオンそのものに化けていた。ウマ娘二人に人間が勝てるわけがない。世界平和のため、再び白旗を掲げた。
「悪かった。降参。もう一度チャンスを」
「許します……」
気を取り直して、『正しい』回答をやり直した。
「ユーバーレーベンさんは、何だかゴールドシップの奇想天外さにおとなしさをブレンド

した雰囲気があるな」
「ゴールドシップさんに似ていると言われたら……もうこれは喜びの舞を踊るしかないのでは……？」
　ゴールドシップに喩えた言葉を送ったところ、やはりというか、想像の通りの喜びの反応が返ってきた。そして、それを見ていたウインキートスさんが心底羨ましそうな声で感想を漏らした。
「私もゴールドシップさんに似ていると言われたいなあ」
「彼女に似ていると言われたいのは君達くらいだと思うな。だからこそＧＣＣを立ち上げる熱量があるのか」
「そうですね……でも学園内にはまだファンが大勢いるはず……」
「私達は学園中に隠れているファンを見つけださなければなりません！」
「がんばれー」
　クラブ拡大への強い熱意を燃やす二人を応援した。

「さて、第三問……トレーナーさんには悩み事がありますね……？」

「もはやインタビューではない気がするが……。それ占い師の常套句だよね。だいたいの人には悩み事があるから、そこからいろいろ話を誘導して聞き出して、その情報から導き出したアドバイスを『お告げ』として指し示すという」

「チッ」

「舌打ちされた!?」

満面の笑顔で凶悪な舌打ちを食らった。

「ちょっとユーちゃん」

「仕方がありませんね……単刀直入に言います。悩みを言え」

「今度は命令形だ！」

「アハハハハ……」

「悩みの百個や二百個くらい……あるのでは……？」

ものすごく強い押しで悩みを話すよう迫る意図がよくわからないが、ひとまず目下の悩みを口にした。

「そうだね。ゴールドシップの弟子を名乗る子にからまれて困っているという悩みがあるんだけど」

「それは悩みではありません……」
「人生最大の悩みなんだがなあ」
「むー……」
一転して大変不機嫌になったユーバーレーベンさんを宥(なだ)めるのも兼ねて、本当の悩み事をひとつ述べた。
「まあ、ひとつだけ真剣な悩みがあるとしたらだ、チームの編成をどうするかだいぶ悩んでいる。今のところ、距離適性判定で見ると長距離、中距離の顔ぶれなんだが、あと一人か二人入れるとしたら、まずは距離適性を固めてメンバーを選ぶか、将来構想に向けて今から幅広い距離やバ場に対応できるようメンバーを揃えるか、というところだが」
「これは大変……」
「チームを運営するのって大変なんですね……」
「もっと人数が増えたら当然幅広く来てもらうんだけど、まだトレーナー一人、補助一人みたいな感じだからな」
「さすがにこれは……私達が何かしら言うのは難しい……」
「ベテランのトレーナーさんの腕の見せ所ですね」

「トレーニング計画担当とチーム管理担当、事務処理担当に分身したいところだな」
「がんばれー……」

インタビューだか尋問だか分からない会談を続けていると、部屋にマックイーンが来た。
「失礼いたしますトレーナーさん。……あら、貴女方は」
「お邪魔しています……」
「こんにちは！」
「ごきげんよう。そういえば、ゴールドシップさんのファンクラブにドーベルが加わったそうですわね」
「はい……会員番号三番です……」
「いつの間に？」
俺の質問に対して、ウインキートスさんが分厚い会議録を開いて示してくれた。前々回の第二回定例会の時らしく、第一回のチームミーティングのわりとすぐ後に開かれていたらしい。カフェテリアの片隅でここの二名と――

「『容疑者メジロドーベル先輩』……？？？」

「ええ。そこに記載した通り、我々が尊敬し、崇拝するゴールドシップさんとの仲が砂糖百トンを一気に食べさせられた気分になるゲロ甘カップルである容疑』についての取り調べ――コホン、インタビューを行いました。結論から言うと、その証拠物件だったメモ用紙は、先日こちらにいらっしゃったアグネスデジタルさんが描こうとしていた漫画の『プロット』と呼ばれるものだったそうです」

ウインキートスさんが抑揚（よくよう）をつけずに一気に喋った。心なしか目が据わっているように見えた。

「しかし私は悟りました。定例会の時は単なる物語ということで一旦引き下がりましたが、あれから数日考えていて、時々学園の中でドーベル先輩のことを見ていたら、やはり我々の抱いていた疑念は単なる作り話ではなく本当の話である、あるいは本当の話になってしまったと思わざるを得なくなりましたグギギギギ……！」

「キートスちゃんが壊れた……」

思わぬところでスイッチが入って暴走を始めたウインキートスさんに、いつもとは逆の立場になったユーバーレーベンさんが若干引いていた。横で聞いていたマックイーンも苦

笑いを浮かべていた。
「まあ、ドーベルがゴールドシップさんのことをもし本当に気にかけていたとしたら、その気持ちは分からなくもありません。不思議と魅力的で、とても楽しそうで、でも時々憂いを帯びた表情を見せるところに心惹かれます」
「なんというか、結構よく見ていらっしゃるんですね」
「この愛の告白、ＧＣＣに勧誘するにふさわしい……」
「なっ!?　告白などではありません！」
「そこのところはどうでしょうかトレーナーさん」
ウインキートスさんから真顔でこちらに話を振られた。正直どう答えたものか困るところだが、ひとまずは思ったままを回答した。
「うーん、……確かに恋バナを語る子がこんな感じだったように感じられたが」
その言葉に、なぜかユーバーレーベンさんとウインキートスさんがガッツポーズをして、マックイーンの顔が即座に紅潮した。
「な、こ、こい、――ッ！」
「マックイーンさんが煙を出して倒れちゃいました……」

「安らかに眠れ……」
マックイーンのことをなむなむと拝み始めたユーバーレーベンさんに指令を出した。
「お菓子とジュースを持ってきて！」
「ラジャー……」

目を回しているマックイーンの口に、ユーバーレーベンさんがジュースを流し込んだ。ジュースで溺(おぼ)れさせる気なんじゃないかというくらいグリグリと荒っぽく突っ込んでいたのは気にしないことにした。
ジュース投与から数秒でマックイーンは意識を取り戻した。
「……ハッ！」
「目が覚めましたか……先ほどジュースを投与しましたので、次はこちらを……」
ユーバーレーベンさんが差し出した饅頭にノールック・ノータイムでかぶりつき、それから半ばひったくるように手に取って食べ進め始めた。
「このお饅頭おいしいですわね。どこのですか？」
「ゴールドシップが今朝持ってきた手作りのやつらしい。名前は『メジロ饅頭』だと高ら

かに宣言していた」
「なぜにそのような名前を？　どういうわけかその単語を聞くと心がそわそわしてくるのですが」
「もしかして……マックイーンさんのほっぺがもちもちおまんじゅう……」
「あー……」
ユーバーレーベンさんの感想に、ウインキートスさんが感心したような声を漏らした。それを聞いてなるほど確かにと思ってしまったが、口に出してしまうと明日は学園の査問会かメジロ家の処刑前弁明に立たされることになる。
「太ってなど……太って……うう……」
「必要があれば、身体をよく整えるためのメニューを今から組むが」
「ダイエットを頑張りますっ……まずは独力で……ですからどうか私を信じていただきたいのです……うう……」
「わかった。何かあったら遠慮なく俺か、保健室の先生か、身体作りのインストラクターに相談してくれ」
「承知いたしました……」

「さて、先の告白を受けてどうしましょうか……マックイーンさんも私達の手下に加えましょうか……？」
「しれっと傲岸不遜になってないユーちゃん？」
「それほどでもー……」
「多分褒めてないと思うぞさっきの言葉」
「むー……」
俺とGCCメンバー二名の計三名でわいわいやっていると、マックイーンがあごに手を当てて何やら考え始めた。
「GCCですか。ゴールドシップ、えーと」
「ゴールドシップ・クルー・クラブです」
「それに加わってもよろしいでしょうか。ゴールドシップさんが語るには、私とゴールドシップさんには何やら縁があるようではありますし、面白そうな方々の面白そうな活動にも興味がありますので」
「おお……！」

「ありがとうございます！」
さらりと毒というか意趣返しが交じっていたような気がしなくもないが、二人はそれに気づかなかったか、気づいても先ほどの俺との話の時のように意図的に流したようだった。

「それでは、定例会はこのような感じで……学園各所に出没しますので……」
「ご都合が合う時にお集まりください！」
「よろしくお願いいたしますわ」
「そうだ。トレーナー室に来る時は、あまり大量に物を持ち込まないでくれると助かる」
「わかりました……ではこれらはここに置いて帰ります……。これならば『来る時に大量に持ち込む』ことにはならないので……」
「一休さんかゴールドシップが言いそうなセリフだ……」
「ゴールドシップさんらしいことを言えた……最上級の賛辞を頂き光栄の極み……」
「いや褒めてないからね？」
分厚い会議録などをきちんと持ち帰るよう要求した。それを受けて、ユーバーレーベン

さんはぶーぶー言いながらそれらを頭の上に数冊器用に積み、さらにウインキートスさんが数冊抱えて頭を下げつつ帰っていった。

「何と言いますか、ゴールドシップさんのお弟子さんは予想以上に強烈な個性をお持ちなのですね」

「あのゴールドシップにして、この弟子達あり、だな……」

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

pixiv 連載シリーズ『訳ありなゴールドシップ』の第二巻です。第一巻から間が空いた上に本が薄くなっているのは我が不徳の致すところであります。

ゴールドシップの意向により集められたチームメンバーと、とある事情から預かることとなった天才少女、ゴールドシップの弟子を自称する不思議なコンビが一堂に会して、新年度のスタートを切りました。切りましたが、第二巻の予定の分量の手前に複数の中間目標が登場して、そのうちの第一段階までの到達であるため、誰一人として走っていませんしトレーニングもしていません。この事態は我が不徳の致すところであります（二回目）。

さて、『ウマ娘 プリティーダービー』ゲームの方では新しい世代の子達がどんどん登場してきており、この原稿を書いている三月時点で、19世代からグランアレグリアさん、ラヴズオンリーユーさん、クロノジェネシスさん、カレンブーケドールさんがウマ娘化され、20世代では前々から発表されていた牝馬三冠（ウマ娘的にはティアラ三冠）を達成したデアリングタクトさんも詳細な紹介がようやく登場しています。自分が書くこのシリーズで大変重要な立ち位置を占めるＧＣＣメンバーは、ウインキートスさんがデアリングタクトさんと同じ20世代、ユーバーレーベンさんがそのひとつ下の21世代であるため、実装の足音はすぐそこまで来ています。ウインさんからはウインバリアシオンさんがウマ娘化されているため話は早そうですが、戦績的にはウインマリリンさんが出そうです。サラブレッドクラブ・ラフィアンさんからは今のところはウマ娘化されたお馬さんは出ていません。諸条件が整い、実装が成ることを期待しています。その時は本家本元のキャラ付けがどうなるかも気になります。

そして、ここに挙げたお馬さん（全員牝馬です）も繁殖の任について仔が生まれる時節となり、ちょうどこの原稿をゴリゴリ書いていた三月三日にユーバーレーベンさんの初仔

（父・イクイノックスさんの牡馬）、そして三月八日にデアリングタクトさんの初仔（父・ベンバトルさんの牡馬）が誕生したとの報を受けました。実にめでたいことです。

今年もpixiv投稿や同人誌製作を進めていきます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

麦（穀物P）

黄金の船、たどり着きたる先　二

著　者：麦（穀物P）
発行元：麦之穂
サイト：https://muginoho.ehoh.net/
連絡先：circle_muginoho@aotake91.net
発行日：二〇二五年（令和七年）　三月三十日
印刷所：ちょ古っ都製本工房（https://www.chokotto.jp/）